

氏名	わだ あつむ 和田 萃
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第 324 号
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	日本古代の儀礼と祭祀・信仰

論文調査委員 (主査) 教授 大山 喬平 教授 鎌田 元一 助教授 吉川 真司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本古代における喪葬儀礼や即位儀礼、古墳・陵墓をめぐる諸問題、道教的信仰・神仙思想や基層信仰、各地域における祭祀の実態とその歴史的背景などの究明を目的としたもので、全6章から構成されている。

第I章では、大王・天皇崩御の殯を取り上げて政治史的観点から分析を加え、喪葬儀礼・即位儀礼全般に論を及ぼしている。殯とは遺骸をすぐ埋葬せず小室内に安置し、一定期間遺族や近親者が諸儀礼を尽して奉仕するという、日本古代において普遍的に行われた葬法である。論者は殯の期間、殯宮の営まれた場所、殯宮での諸儀礼、火葬の採用による殯の衰退過程など多方面からの考察を行い、天皇・大王の殯の期間には皇権の所在が不明確であって、皇位継承者が政治権力を完全に掌握していない場合、往々にして政変が起きたことを解明し、穴穂部皇子や大津皇子の謀叛事件をそうした観点から意義づけた。また、殯宮儀礼には亡き天皇の幽魂を慰撫する諸儀礼とともに、皇位継承者に対して服属を誓約する儀礼が存在したこと、殯宮は宮に近い河原か、内裏内の大殿南庭のいずれかに営まれ、後者は宮の構造と密接な関係をもつことから、殯の衰退の一要因として大極殿の成立が想定し得ること、などを述べている。こうして喪葬儀礼と即位儀礼の密接な関係を明らかにした論者は、さらに進んで即位式・朝賀式に用いられた高御座(タカミクラ)を分析する。高御座は儀礼に際して臨時に設置される八角三層の御座であるが、論者によれば、この形状は天皇が大八洲国を統治するという観念に基づくものであり、高御座が舗設される朝賀式・即位式の儀礼構造は同一であった。そして、踐祚(即位)式と大嘗祭からなる日本古代の王位継承儀礼については、後者は持統朝に新しく成立したものであり、即位式こそが大化前代の古い儀礼を継承したものであったと主張している。

第II章では、古墳や陵墓に関わる諸問題が扱われる。まず埴輪については、埴輪作りに適したハニ(埴)のあるところに、土師氏の居住や巨大古墳の分布がみられること、五世紀中葉から出現する人物埴輪を中心とした埴輪群像は、被葬者の生前の功績のうち最も精彩ある場面を再現したものであることが述べられている。また装飾古墳の出現に関して政治史的解釈を試み、同心円・靱などの文様をもつ古墳の被

葬者が軋負大伴である可能性を示している。ついで論者は古墳の被葬者を積極的に推定する作業に移り、天智天皇陵（推定被葬者は天智天皇）、中尾山古墳（文武天皇）、岩戸山古墳（筑紫君磐井）、梅山古墳（欽明天皇）、見瀬丸山古墳（宣化天皇）、益田石船（蘇我入鹿「今来双墓」）、鳥谷口古墳（大津皇子）、東明神古墳（草壁皇子）について考証を加え、被葬者がほぼ確定できるとしている。またこれに関連して、近世の山陵治定の歴史を詳細に跡付け、幕末の山陵研究者平塚瓢斎の評伝を付す。最後に墳墓地に関する法令（喪葬令皇都条）を取り上げ、日本の律令規定にはケガレを忌避する意識が深く刻印されていること、また藤原宮の南に陵墓が営まれたのは中国洛陽の影響が想定できること、などを論じている。

第Ⅲ章では、日本古代における道教的信仰の実態や神仙思想の受容について考察が加えられている。論者によれば、日本古代に道教は伝来しなかったが、渡来した人々によって道術と神仙思想を二本柱とする道教的信仰が伝えられたとされる。まず鏡をめぐる信仰が分析され、それが神仙思想と関連が深く、月に変若水があるとの信仰も鏡と結びついていたとの主張がなされる。また、毎年五月五日に行われた薬獵の源流は中国・高句麗にあり、薬となる草や鹿を取るものであったが、典薬寮でテキストとして用いられた『本草集注』には草木・虫獣・玉石が仙薬の効能あるものとして載せられており、薬獵についても神仙思想との関わりが重視されねばならないとする。ついで論者は、古代から近世初頭に至るまで用いられた呪符木簡について、出土木簡や諸文献史料によって総合的分析を行い、また呪符「急急如律令」の東アジア世界における系譜をたどって、呪符木簡が道教的色彩のきわめて濃い事物であり、日本における受容が六世紀に遡るであろうことを述べる。このほか『日本靈異記』の樽磐嶋説話にみえる率川社の八卦読みに注目することによって、道術をこととする陰陽師が民間に存在したことを示し、また養老改元の契機となった美濃多度山の美泉が、変若水と意識されていたことなどを述べており、このようにして道教的信仰のさまざまな受容の様相が明らかにされている。

第Ⅳ章では、日本古代における祭祀の諸相が論じられている。まずオトタチバナヒメ入水伝承を手がかりに、タチバナ（橘）は常世から将来された聖樹であるとの観念が存在したこと、道と道が交わるチマタでは定期的に市が立ち、タチバナを始めとして椿や槻などの聖樹が植えられていたことが解明される。さらにチマタについて考えを深めた論者は、飛鳥をめぐる四地点にチマタがあってそれぞれに祭祀・誓約の場となっており、飛鳥寺西の槻樹広場もそれと同様の空間として把握すべきであると主張し、こうしたチマタは非日常的空間であったから、夕暮れ時には夕占が行われ、京城四隅のチマタでも官察として道饗祭が行われたとしている。また、藤原京右京5条4坊から出土した木簡・祭祀遺物によって、大宝令施行以前に下ツ道の路上で臨時の国家的祭祀（大祓）が行われたこと、当天下ツ道が藤原京の西京極大路として機能していたことなどが主張されている。さらに論者は日本古代律令国家のイデオロギー全般に考察を及ぼし、それが儒教的な倫理規範を根幹としつつ、基層信仰を神祇令に、仏教を僧尼令に盛り込んだが、道教的信仰は原則として排除されたことを明らかにする。また、仏教伝来によって基層信仰が変化していった過程を跡づけ、大仏造立を契機に宇佐八幡宮が東大寺鎮守として分祀され、大仏開眼会の行われた年に神祇との関係が深いお水取りが開始されたことを、神仏習合の起点として重視している。さらに伊勢神宮の忌詞を分析し、基層信仰における仏教忌避の観念、奈良末期～平安初期におけるケガレ観念の肥大化などを考察している。

第V章では、古代大和における基層信仰が分析される。まず三輪山祭祀について、かつては大和王権の王自らが祭祀に当たっていたが、6世紀後半には三輪君がこれに代わり、同時に三輪山の神も王権の守護神・軍神から靈力の大きい祟り神へと変化したことが明らかにされる。また石上では元来、布留川の祭祀が行われたが、5世紀後半に王権の武器庫が移され、武器神であるフツノミタマが物部連によって祀られ石上神宮が成立すると論じられている。ついで飛鳥・葛城における祭祀と関連氏族が考察される。論者によれば、飛鳥では神奈備山や飛鳥川に対する信仰が飛鳥坐神社の祭神とされ、蘇我氏や渡来系氏族によって大歳神・御歳神の祭祀が行われたが、同様のことは葛城の諸神についても指摘できるとされている。最後に吉野の歴史と祭祀・信仰について多方面からの考究がなされ、吉野が神仙境と考えられていたことが明らかにされるが、議論の多い持統天皇の度重なる吉野行幸についても、吉野町宮滝にあった吉野宮から遠望される水分山（青根ヶ峰）に対する信仰から理解すべきであるとの所見が示されている。また、吉野のカネノミタケに対する信仰については、各種の史料・伝承や大峰山寺出土遺物から、それが奈良時代に遡ることを解明し、さらに自ら大峰登山をして行をした経験をふまえて、熊野修験による大峰奥駆けの実態や歴史的背景を論じている。

第VI章では、日本各地における祭祀の実態とその歴史的背景が考察されている。まず『古事記』『日本書記』にみえる神々を、自然神、大地の神、河海の神、物を生み出す靈力、物によりつく神靈、他界の神、氏族の祭る神に分類することにより、古代の人々が抱いた神観念を析出し、さらに儒教・仏教・道教的信仰の伝来と基層信仰の変化が論じられる。ついで神島・沖ノ島に見られる島神祭祀が考察され、前者では大和王権の東国進出、後者では王権から宗像君・水沼君への祭祀の移動といった論点が展開される。ついで出雲祭祀については、風土と服属経緯を異にする出雲東部・出雲西部・隠岐それぞれの歴史を追跡し、さらに出雲大社（杵築大社）の創始伝承を検討することにより、かつて斐伊川中流域にブレ出雲大社が鎮座していたことが明らかにされている。最後に伊勢神宮創始の背景についても考察が及ぼされる。伊勢内宮の相殿神である天手力男神と万幡豊秋津姫命に注目して、前者は櫛田川中流域の佐奈県で祀られていた神、後者は桑や麻の栽培が盛んな下流域で祀られていた神であったことが想定されている。すなわち内宮主祭神の天照大神は大和王権の奉祭する神であったのに対し、相殿神は在地の氏族の信仰と深い関係をもっていたというのが、論者の得た知見である。なおこれに関連して、櫛田川流域に大和王権が進出した目的として、伊勢水銀の採取があったであろうことも推測されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本古代における喪葬儀礼や即位儀礼、日本古来の基層信仰、6世紀に中国・朝鮮の諸国家から伝えられた道教的信仰などについて、総合的な把握を試みたものである。第I章で喪葬儀礼と即位儀礼、第II章で古墳をめぐる諸問題、第III章で道教的信仰や神仙思想、第IV章でチマタにおける祭祀や大祓、第V章で大和における祭祀・信仰、第VI章で熊野・出雲・伊勢など日本各地における基層信仰が論じられ、1400ページをこえる大冊を構成している。

日本古代の儀礼・祭祀・信仰は、古代国家の形成史や特質を知る上で、また日本の文化・宗教全般を考える上で重要な手がかりとなるため、これまでも数多くの研究が積み重ねられてきた。その源流は江戸

時代の国学にあると言えるが、伝統的文献史料の解釈・考証に重きがおかれてきた。近代歴史学の成立によって民俗学・人類学・宗教学などの方法も活用されるようになり、また戦後は近代天皇制の制約を脱した新しい研究が生み出されている。本論文はこうした諸研究の成果をよく消化・活用した文献史学的研究であるが、これに加えて近年急速に進んだ考古学・歴史地理学による知見を意欲的に取り入れ、さらに東アジア史的観点を堅持することによって、豊饒かつ斬新な論考を繰り広げている。

論者は、遺骸を小屋内に一定期間安置し、遺族や近親者が諸儀礼を尽して奉仕する「殯」という葬法について初めて総合的研究を行った。論者によれば、大王・天皇の殯の期間には皇権の所在が不明瞭で、皇位継承が政治権力を完全に掌握していない場合、しばしば政変が起きた。また、殯の庭で行われる儀礼には先王の幽魂を慰撫するとともに、新王への服属を誓約する様相が濃厚であり、それは大嘗祭での諸儀礼とも共通していた。かくして喪葬儀礼と即位儀礼は皇位継承儀礼として統一的に理解されることとなったが、ついで論者は八角三層の御座「タカミクラ」に着目して、即位儀礼についても独自の見解を述べる。タカミクラの形状は大八洲国の統治を象徴するもので、タカミクラが用いられる即位式と朝賀式の儀礼構造は同一であった。そして即位式こそが、持統朝に成立した大嘗祭よりも本来的な、大化前代の古い儀礼を継承するものであったことが明らかにされている。これまで民俗学の研究対象でしかなかった殯を政治史的観点から捉え直し、皇位継承研究を儀礼面から深化させた点は高く評価できる。

論者はまた、喪葬儀礼研究を発展させ、古墳・陵墓をめぐる諸問題を論じている。特に注目すべきは古墳の被葬者論である。終末期古墳については積極的に被葬者を考えるべきであるとする論者は、梅山古墳、見瀬丸山古墳、益田石船、鳥谷口古墳、東明神古墳の被葬者を、それぞれ欽明天皇、宣化天皇、蘇我入鹿（今来双墓）、天津皇子、草壁皇子と推定するが、近世・近代における状況をも把握した上で慎重に展開された考証は、強い説得力をもっている。ここには文献史学と考古学との溝を埋めようとする論者の研究態度が鮮明に表われている。

ついで論者は、日本における道教の受容について考察する。古代日本に道教は伝えられなかったが、渡来人によって道術（道士法）や神仙思想がもたらされたとする論者は、それらを「道教的信仰」と把握すべきであると主張し、さまざまな受容の様相を明らかにしている。まず鏡をめぐる信仰や、養老改元の契機となった美濃多度山の美泉が分析され、それらが神仙思想、特に変若水信仰と関係していたことが指摘される。五月五日に薬草や鹿をとる薬猟についても、典薬寮でテキストとして用いられた『本草集注』に草木・虫獸・玉石が仙薬の効能あるものとして載せられていることから、神仙思想との関わりが重視されねばならないとする。さらに論者は、古代から近世まで用いられた呪符木簡について多角的に論じ、それが道教的色彩のきわめて濃い事物であり、日本への伝来が六世紀に遡ることを解明している。このほかにも道術をこととする陰陽師が民間に存在したことを証明するなど、従来ともすれば軽視されがちであった日本道教研究に貴重な指針が与えられた。

基層信仰や祭祀については、まず道と道が交差する空間＝チマタに焦点をあて、チマタには定期的に市が立ち、道饗祭などの祭祀や大祓が行われたこと、また言語信仰に根ざす夕占が行われたことが解明されている。ついで大和および日本各地の神社・祭祀に検討が加えられる。論者はまず三輪祭祀を取り上げ、王権と祭祀の関係を考察する。それによれば、三輪山の祭祀は重層的で、大和王権の王自身による祭祀か

ら三輪君による祭祀へと移行し、それについて祭神の性格も王権守護神・軍神からタタリ神へ変化した。石上神宮、住吉神社、沖ノ島に関してもこれに似た祭祀形態の変化がたどれるという。論者はまた、吉野をめぐる信仰の推移を探り、古くは吉野の水分山（青根ヶ峰）に対する信仰が中心であったが、奈良時代後半になると吉野川上流の丹生川上神が重視されるようになることを示し、さらには修験道の成立にいたる歴史過程を明らかにした。ついで各地の在地祭祀と王権の祭祀の相克が論じられ、沖ノ島祭祀遺跡、出雲大社、伊勢神宮内宮神などの成立と変容の過程が解明される。こうして基層信仰の実態と、それが王権の伸張と仏教・道教的信仰の伝来によって変化し、律令国家祭祀へ結実していく過程とが、鮮明に示されることになった。

以上述べたように本論文では、堅実で目配りの行き届いた文献史学的方法と、新しい考古学・歴史地理学的方法が高いレベルで統合され、日本古代の儀礼・祭祀・信仰に関するこれまでの研究水準が大幅に高められている。論者によって初めて明らかにされた史実や、大きく修正された歴史認識も数多く、しかもそれらが体系的に提示されており、本論文が今後の研究の揺るぎない基盤となることは疑いない。

ただ本論文では、王権と祭祀を考える上で重要な伊勢神宮に関する論究がいささか手薄との感があり、その創祀年代にも異論がありえよう。またケガレ・物忌の問題についても、なお考察を深める余地があると思われる。方法的には、小字地名の利用にやや疑問が感じられる部分があった。しかし、これらは本論文にとっては微かな瑕疵と言うべきもので、論全体の価値をいささかも損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1996年12月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。